

のアパートを探してそこで撮れば六畳一間になる。要するに説明だけではなくて、その場所に行く、もしくはそれをリアルに作る。だけど、演劇はそれがいとも簡単にできる。立っていて、舞台上にいるのに海の音が聞こえてきて、突然立ち上がり、そこに光が当たって「海に来た!」と言うだけで海になるんです。それって表現としての自由があると思うんです。僕は演劇が最も自由だと思っているんです。演劇もやっているけど、映画人として演劇って自由でいいね、と思う。それを感じて欲しかったという部分もあります。

■又吉さんの小説は描写が細かく、脚本にするのは難しかったのかな?と思いますが、脚本を手掛けた蓬萊竜太さんとはどんなお話をされたのですか?

一話はほとんどしてないです。蓬萊が自分が演劇人として、この人達の気持ちが理解できるだろうと。それに僕としては後ろ盾が欲しかったというのがあります。僕もシナリオを書いたんだけど、これは他者が書いた方がいいと。そして書いてもらうのなら演劇を熟知している人間が、その苦悩も含めて書いた方がいいと思ったので、彼にお願いしました。蓬萊が作って来た脚本は、本当に必要不可欠な部分だけを繋げていて、それが見事だったので、映像としては感情で紡いでいったという感じです。

■永田を演じた山崎賢人さん、これまでに見たことのない表情がたくさんあって驚きました。どのようなディレクションをされたのですか?

一髭を生やしてほしい、髪の毛を伸ばして欲しい、くらいかな(笑)。後は自由にやってもらって、解らなかつたり、思うところがあつたら聞いてとは伝えていましたが特にはなかつたですね。むしろ永田が沙希をどう思っているか、というところだけがブレたらダメだから、そこだけは違うと思つたら止めるねとは言いましたが、ほぼそういうことは無かつたです。松岡茉優さんはとても細かく、沙希という女性の歴史を自分なりに作りあげてきていたんです。そしてその沙希が山崎くん演じる永田と対峙した時に、どうなるか。その中で二人が共鳴した芝居をしてくれたからこの「劇場」という作品が出来たと思っています。むしろこの二人じゃなければ作れなかつた作品です。

■お二人は役者として、永田に共鳴する部分があつたのでしょうか?

一よく解りますって言うていたのであつたと思いま

すよ。特に山崎くんは、これまで彼にオファーされることがない役ですし、こういう作品は役を理解できないと演じられないと思いますから。断られるかもしれないけど、と思って台本を渡してオファーしたら、山崎くん自身が「絶対にこれはやりたい」と言うてくれたんです。その時点で彼が永田に共鳴していることが解りましたし、うれしかったですね。これまでたくさんのキラキラした作品に出演してきている、そんな彼が「これをやりたい」という言葉が出たことが表現者としてそういう感情になったんだと思います。だからこそ、永田をこれだけ必死に掴もうとしたんだと思います。それだけでもうれしいですね。そういう俳優と一緒にやりたいなと思いますから。

■ここに描かれている演劇界の空気は、今ではなく、10年くらい前の空気感だと感じました。その10年前の雰囲気を作ろうと思ったのはどうしてですか?

一今である必要はないと思っているのと、個人を描いているから、永田みたいなヤツが今の時代でもいると思うんです。むしろ今の若い演劇をやっている人たちがこれを見て、どう思うか?という事ですね。持論ですが、映画は少し前の時代を描く方が後世に残っていくんです。今現在を描いた作品を今公開すると、少し前の時代を今描く方が、作品としての強度も高い。それに、今を描こうとすると表現としても現実と照合してしまうので、窮屈に感じますが、少し過去を描くことで、表現の自由度が増すこともある。僕はこの作品に絶対的な自信を持っているので、この後も残っていく作品にしたかった。だから10年くらい前の空気感、少し前の空気感描いているんです。だからこそ、今の人に見て欲しいですね。今、その感覚が解らなくてもいいけど、でも10年後にはきっと解るから。



© 2020「劇場」製作委員会

『劇場』 7/17(金)全国ロードショー

監督/行定勲 原作/又吉直樹「劇場」(新潮社) 脚本/蓬萊竜太  
出演/山崎賢人、松岡茉優、寛一郎、伊藤沙莉、井口理(King Gnu) 他  
(2020・日・136分) © 2020「劇場」製作委員会

<https://gekijyou-movie.com/>